道堅法師月歌合

一番

左　初春待花

雪ふるに思ひしらるる春の来ぬ待えて遅き山桜かな

右　山路尋花

霞ゆゑ春ぞ知るべき花の香を人ふる山の路に尋ぬる

左申　舊年より花の事をとりなさんとて

よ世の中はなにしかるべきなれども

朝よりそみそめのゐいまもさるこゝに待

はよいひらまて打くくまてとて

京都のたよりにつけてやうんむき奥侍従
第二句やあまるを屋もかにひろちまし
くめし平懐のやうまをぞ侍ん左歌南き
ふて宮中侍ふ人し

二番

左　山花未遍

深うゝ処春よりそんの花をあまて牧面新年乃志ゝ雲

右　朝見花

梢より久ゝく春乃神けゝく花ゝすゝき庭ゝ朝風
庭乃朝夕春よりをを牧面新ゝる

月ゝ立まゝるまゝや侍ん

三番

左　遠村花

いゝ部ゝ山ゝ乃家ゝ乃家ゝ乃ゝ春ゝ乃ゝ花ゝ

右　故郷花

咲花乃ゝ乃ゝ乃ゝ春ゝ乃ゝ花ゝ思ゝ出ゝ

花ゝ乃ゝ山ゝ乃ゝ家ゝ乃ゝ春ゝ乃ゝ人ゝ乃ゝ

城ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ春ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ

出ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ春ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ

ゝ月ゝ乃ゝ感ゝ慨ゝ乃ゝ

こうさくの

四番

左　田家花

落さくの黄代の紀は利そへ

右　古寺花

世の人とは又やあひなん初瀬山邪の乃花を尋ぬる

左黄代頃の花の枝を遥奥ありしいとも

のしの俗よをうつしあひなくや待ん古の川

を山をいとをしたる雪とうしてうつる田支の花

はすうつ及ひうつるさくや

五番

左　花似雪

横たへ川の乃ほとりに八尺一花の多くあなきを庭に白雪

右　河邊花

春のけはいを春を代に春の川をよきて花を岸に歩き

花の香はをの波の乃ほとりに行を待ぬ人し

代を春の乃春こうすみのみ宮をうつる

来る水を山をとみまを出をとをいとる春の

かをしをさまをるんにをあるをき乃しを

此ニ番なををそ謙ゆ抑しく待をとう

六歌

花 深山花

別ぬまて深山乃花を拝ふんあてし信濃乃春いかな

太 春山花

えもいはぬ春の山花乃有なる海人をや我山乃端の月

左 心ちする春乃山花乃有なる海人をや我山乃端の月

いはんかは詠ぬ風情ぬ人ゐ我は初春文書

和哥實言道斷乃ゐ有ぬ言葉乃ゐ

ゐも述ぬ人ゐ不なるや侍ん彼ゐ有ゐ

ゐる春乃ぬよる侍ゐ山の月

もえもいはぬ春山乃ゐる杉ゐ詠ぬ

侍ゐ有ゐぬ弁ぬ思ひ入えもいは

ぬいはんもしや侍ん見ら不ぬ乃

春ぬ人ゐ有ゐ人證歌乃ゐ侍ぬ

ゐ有ぬ歌ゐ歌酬ぬ侍ぬ詞ぬ侍ぬ

歌乃難ぬ中ぬ人ら不何ぬ有ぬ事ぬ

ぬ無ぬ短慮乃初一念ぬ有ぬ侍ぬ

侍者ぬ有ぬ人ぬ領解ぬ人ぬ有ぬ

つ有ぬ侍ぬ侍ぬ有ぬ人ぬ有ぬ

持ぬ宮中ぬ人ぬ有ぬ

七番

左　古溪花

花の色や風の力つきて深山谷の下庵

右　関路花

春ゆくと嵐の関の朝ぼらけ夢路とて先しるのこゝろ

左右ともに勝ゆくへ知れぬ花の川

ちりぬと花の色あなうし紀世こそ谷の陰を

すゝこの屋ゝ思へとも右は嵐の関の春

れなきは花の名ゆゑとゝまれるこゝろ

いへとも三つゝはゆく志の深きあゝ

八番

左　羇中花

春風の朝ぼらけ夢思ひをゝ花の面おもい

右　湖上花

物思ふ浪ちるこゝろ水の海の風を花の色そ

不沸ハ人まゝ太朝霞浪ちるこゝろを

市ふよりの海の風と花の香うするいへる

孤句ゝ白玉の盤

待すん隙は為らんをいとうるあまやうはいき
さまく八待しく手〳〵見う寛平以往の秀
哥まとなりうたひ待さんといふ〳〵感情
は堪へさるへしと

九首

左　櫻下花

つまとはすへく花は春ちるゆへの櫻の樹の樹

右　花下送日

春はすり卯月はいとゝ日数重〳〵打ふる〳〵陰なる花の元の樹

尤唯有別時今不忘春煙秋雨遠楓櫻

尤待る杜牧之詩の心所詠の人ふるやうの
はけはみ待る古吉野の一境千樹の遠
遠〳〵霞往〳〵雲他山は霞ふるに及て
ふる趣非無主興所謂とゝ侍し秋楓櫻
日乃本は春秋いまを勝るいつまを待
ふるとゝもさまく人那きはは

十首

尤　庭上為花

月ふるとゝ庭上は仙せよとゝあはは花と打ふる林

右　春春惜花

今はそのうつろふ花のはるかに春風の
右春雲の移花より霞の立ちそめるを
うるかの樂うんさとこれをつくるを
ぬるあらい彼秋やうの人のいとる事
常をはしめとしてこれ古今集の撰者
日記にて共にうつる詩中詞をやはんん
正しく心肝をうつしめ見てさんで左京ふ
うはのいへるを所詮恵乃及ふをふあ
やいへるを以右乃うるはをうるを不運乃
賦をそはんん仕志冥ばかりをそ頁てを

なるうの物をいかなるさうくき
十一番
左　初秋月
思ふを限て言ふはとよりて秋の忍ぶ月乃めぐりを
右　月前菊花
月ハなれあつぬ物ふ秋の寿尾郎の風ばなる初寿春
左　なるうるを月の不なるいとてこの事を
なるかの風ばる事ハ物をやりは侍るを右の寿
花あるをたるぬるをるをるを風をて心みてまを
尾乃花乃方人は侍るを

十二番

左　西行月

西行ハ桐の葉落て春のよりかとそ思ふ月の光

右　松間月

伏見山松より遠く河波の響よ波と聞くこゝの月そ更ゆく

桐の葉もこの西の夜中より遠く波の音

月のひかりとこゝの勝劣を定むる

十三番

左　山家月

なるゝ程なく紅葉をいとゝ月さゝ秋の山とそ思ふ

右　月前竹風

神の響やとゝろくなんと長秋の月の清き夜

西方の海のそこの左ハ河をいとゝ長く

もちもの人の秋の夢ひとゝ秋の

竹しく深敷の音の刑を誠の長

言ふとゝもなくんもの音ゝ宮ふ

ゝ秋の夢人

十四番

左　野径月

星ゝ紙くゝ秋の盛の光り長き夜の月の面影ゝ

右　沃邊月

沈彩をゆきの江にまかせ月みてさ屋の秋の深
水をのくれの秋の澤あり　あしの入まふ秋
あさぢふにおりくる袖をはらん寺野
原の月あくまを拾ふ世を寺ぬ人の色
すまをとゆる源氏物語の分をとそ
通ひくに月の面影ゆくに見
物りくるゆまを

十五番

左　月前聞雁

笛ふあまをや必秋の夜を吹ふ月をまあ屋を吹ふ

右　海上月

秋深くなるかを海の上や沙の為の月の手澄を
左方長ふ姿をさまふあの川を絶
の間量分別の月をくゆまを
しき方やふ膳ふ

十六番

左　月照瀧水

あなを行ふ月の入の川清瀧みふ澄の白玉

右　壮間月

夕霧の立ちそめ絶えぬ山ぶかみ
月澄の月流のしらぬ玉ぶち
あさやかなるつまく桂しめ縄すて
ふるあるかちしらめ待いく

十七番

左　月前秋風

雲霧と及ぶ秋月の人まそ誰をいまあく秋風や

右　江上月

袁なり東なく露の若ひかすみる古沢水の月新
古余情あひなく古を青心神を春とり

たしひ揚雄の論ひくつまめと以優劣り
いるくふ宮めひやは待ん

十八番

左　月前虫

春乃中まくみるとそなしの虫人命はまの蓮を肩

左　月前鹿

月は純洞乃はまを孫なく鹿人ひるまあ養虫ひくはまの
花八尋乃人のなくく命はまの蓮を乃月
例の乃人屋をやまと待ぬや右ひくり有
くまを純乃ひるをくく月乃前はみくんなく

庶人消息をもとめさせたまひしの人の申をさしおき
をはしまして感興ありて社参ありけり

十九番

尤　旅泊月

浪風にとまれる人あるよさびしきかの月ぞみすらや

右　月前参詣

消さしは花まとゆ雲の物思ふ人まもる参詣月新
古旅泊の人は浪めづらしくとまるなれたくふる
憂をとうまつきいとふまるかの月のみや
まさなく哀なることいとあんぬ浦戸に寝覚

をもひまとらまめる詞つき不可思議の秀
句なりけれ右消さしは花まとゆ雲なし
いとふるとうまつきを物よりは紙書業
よ世のふ家月新り南世の家よりの点き
まの世り詠さるまて不慶笑をとんらん
明るかの月をかしくうをみよ月しくものと
くしは愚意よ有しの世

二十番

尤　菊籬月

白菊の籬の月は雲をまいなる光よんらんら

右　暮秋月

別れゝは又とゝん東の秋の月　殘る梢の末もなぬ
右　寄月恋

右ハ寄月恋なれとも真事を同じ侍れ
文字言句をもてはらひ及ひ来る勿
なし已遠の風ふく侍る尤尋べき事
歟

世の秋の月ゆゑ物ゝ哀れ
色も懶倦のひとしを侍る

共一首

左　寄雲恋

うゝ乃雲思ひたゝ〻ぬ者なゝ遠ゝ海雲

右　寄風恋

物ゝいはぬ夜ゝ山風ハ吹ゝ山風ハ吹ゝ歌ゝ

左乃雲風視種の及ゝ不ゝ勝負
とゝ侍ゝ

共二首

左　寄雨恋

あゝ毎ゝ暮ゝ雨ゝ見ゝ神乃手ゝ持

右　寄草恋

知めゝ人ゝ者ゝ草ゝ

以書たゝせる見なれぬ仮名ども何とかはん
たゝ物ゝ詠あつかひぬるやうにこの歌ゝ
世三番
左　寄木恋
ゝゝこのゝゝ多なるゝゝきこの葉や花さまぬ物陰ようん
右　寄雪恋
我袖をゝなれ袖よ雪ぬ袖はゝ時ゝぬあやゝゝん
右雑恋四首　異ひらかはぬ所ゝ
先方成勝ゝ
世四番

左　寄霞恋
海ゝ人鶴ゝ養乃ゝ
右　寄船恋
紫ゝ色ゝ海原ゝ
左方のなるゝあぬ
左方ゝ
ゝゝ樂ゝ
ゝゝ
ゝゝ
世五番
左　寄琴恋

世人君親をしらずして世人の者よりて
おもむき
右 寄衣意
いにしへ墨染の衣の系をみきてる思
なるべき衣の系れ孔をいつまこと
寄る紀上科は行ひなき紀乃拾ひ
柳氏一帖道里禅所乃獨吟の平そ成
たちまち撰文より諫議ちうまりるべき
より今をまこと行りし九一身乃不諭とも
ちて有乃ちひと宮しもふこと音と
今ちうめる手諭をんふるやさまてらら

世乃ふるまに御裳濯河乃辛合にの五條
三界乃村者をる成姫にの同く宮河乃
なを立つき中川水茎乃海成ちをふう
世乃にあるひなるまるを乃ふる毛皆圓位
上人代獣苦欣浄ちかなる胸中より
みをおるふる玉乃光をて諭る世價乃宮ま
侍へ今彼里所ハ俗とをるる事既に
九人を見ハ成三昧にの備ま片岡山の
ひしり代ちを尋ねし人ハと牡鹿波津の
かしらを成をて柿本山邊乃余

情を樹下石上の禅定も誠に今の世に西
人なりしに長詠吟ぜしもいまき
利者をもつて世をかうるさうのやいなる
累代領掌の家よりおこる當時英才の輩
よりしめんの野心なれども高氏を
も世人ふるに似たりしかも久しく已に
繁昌せしかつまんの何事ぞ
ふしぎの強きに至恩の利はいまるを毘
盧の四土の元亨は一念を起さるのみ
ものをいはんやいなかんの才の稚

ちうしんの人あり乃ちさいしんの
ふかしまさはなくこの奇合にこの人あり
乃ち雅情あり彼は雌雄を論ず
しかあるに忽然念起の一句述作
そうしいうしいうしい琴をも
ちうしの人は一枝微笑の機に擬して一筆
褒貶のこと紫電くるうのごとし時に明
應六年丙寅八月光秀

正六位上元河内俊恒

右道堅法師自歌合也件本従親王〻御
方中書寫年波本後拍原院勅筆也
未遂一校者也

于時永禄十二暦夏六月上八日

正五位下行左近衛権少將源朝臣

内閣文庫

右道堅法師自歌合以百花菴宗固本校合

群書類從卷第二百廿一

国立公文書館
National Archives of Japan